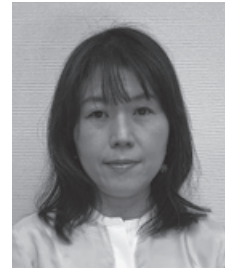


無縁社会から老人漂流社会へ ～取材の現場より～

NHK名古屋放送局報道部(報道番組) チーフ・プロデューサー
板垣 淑子



「無縁社会」の現場から

誰にも看取られず、ひとり亡くなっていく「孤独死」。頻繁に孤独死が起き始め、新聞の社会面に小さな囲み記事がよく出るようになったのは2008年頃からだ。今でこそ、記事にならなくなったが、当時は、まだ孤独死が起きることが珍しかったのだ。

なぜ、これほど孤独死が相次ぐのだろうか。いったい、どのくらい孤独死が起きているのだろうか。その疑問から取材がスタートし、2年後の2010年、NHKスペシャル「無縁社会～無縁死3万2千人の衝撃～」を制作した。

取材の手がかりになったのは、国が毎日発行する「国の新聞」ともいえる「官報」だ。官報には、「行旅死亡人」が掲載される。行旅死亡人は、孤独死が起きた場合、遺族に身元の確認や遺体の引き取りを呼びかけるために、遺体の発見を告知する記事だ。

その記事に、「無縁社会」を感じた。

「〇〇町〇〇番地 アパート〇号室

こたつに突っ伏した状態で男性の遺体を発見。身長170センチぐらい。財布には、〇〇と名前の入ったキャッシュカードや診察券などを所持。玄関にも同じ名前の表札がある。」

といった記事。ごく普通の生活をしていた男性が発作的に亡くなくても、家族と連絡が取れないと行旅死亡人となる例だ。

「デパートの屋上で発作を起こして倒れたとみられる女性。紙袋には、女性用の衣服が入っている。財布には、〇万〇千〇百円の

現金の他、〇〇という名前の入ったキャッシュカードなどが入っている。住所は〇〇と記載があったが、その場所にはキャッシュカードの名前と同じ表札の2階建ての一軒家が建っている。」

といった記事。この女性は、発作を起こして倒れた後、運ばれた病院で亡くなっていた。

私は、その記事に書かれた現場に足を運び、人生の軌跡をたどる取材を始めた。

生きているときに何があったのか、どうして人との縁を失ったのかを取材すれば、「なぜ孤独死に至ったのか」を明らかにできると思ったからだ。

取材は、警察の“地取り”と同じ手法で、近所の聞き込みから始まり、アパートの大家などへの取材で手がかりを得ると、退職前の職場などにも徹底的に遡っていった。100人を超える人たちの人生を遡って取材をして分かったのは、多くの人は、当たり前的人生を送ってきた人たちだということだった。縁も最初からなかったわけではない。家庭を持ち、仕事をして、ごく当たり前的人生を送ってきた人たちが、人生の晩年、ささいな理由から社会とのつながりを失い、孤独死に至っていたのだ。

「ひとり暮らし」が当たり前の老後

内閣府「平成30年版高齢社会白書」によると、ひとり暮らしの高齢者(65歳以上)が600万人を超え、急増し続けている。高齢者の「5

人に1人」がひとり暮らしというだけでも驚くべき数字だが、それだけではない。実に、2000万人近い高齢者が「高齢者の二人暮らし」をしているのだ。つまり、二人が同時に亡くなることは考えにくいから、多くの高齢者は「ひとり暮らし予備軍」ということになる。

もちろん、元気なうちは、これほど自由で気ままな老後はない。しかし、病気やケガなどで誰かの支えがなければひとり暮らしが維持できなくなると——途端に行き詰まる人が多い。経済的な行き詰まり、つまり医療費や介護サービス費用の負担が重いと、年金だけでは家計が維持できなくなるというケースもある。また、近くに頼れる人がいない場合、頻繁に訪問介護のサービスが必要になると、それだけで破産状態に陥るケースもある。もちろん、生活保護に頼る方法はある。しかし、持ち家を手放したくない、住み慣れた家を離れたくない、など様々な理由で生活保護を断念せざるを得ないという人も数多く見てきた。

そうした人たちは、ギリギリの状態まで家で節約しながら——この場合、訪問看護や訪問介護も回数や時間を減らすなどの節約をしている——自宅で暮らし続け、どうしても自宅で暮らせなくなると、自治体が斡旋する施設に移っていくという経過をたどる人が多い。その場合、施設に移る頃には、自分の意思を表明できなくなっている人が多く、「終の住処」を自分の意思で選べずに“漂流”していく人が増えているのだ。

そうした人たちの現実を「老人漂流社会」と表して、2012年から2016年にかけてNHKスペシャル「シリーズ老人漂流社会」で取材してきた。せめて、終の住処は自分の意思で選びたい、そう思いながら取材してきたにもかかわらず、私は自分の老後の「終の住処」をどうするのか、描けずにいる。

老後、誰を頼りに、どこで過ごしますか？

この問いに明確に答えられる人はどれくらいいるのだろうか。

なぜ無縁老人が増えているのか？

なぜ、人生の晩年になって無縁になり、孤独死を迎えてしまうのか。

「縁を失ってしまった」という高齢者を取材すると、そもそも最初のきっかけは配偶者との死別、熟年離婚、退職など、日常のごく当たり前の出来事がきっかけとなって社会との「つながり(縁)」を失った人がほとんどだった。

定年退職で、会社という社会との接点を失い、家にひきこもるようになったという60代の男性は「寂しくなると、用事もないのに通勤電車に乗って会社へ行ってしまう。他にいくところもなく、近くを散歩して帰るだけだ。」と嘆いていた。モータリゼーション世代の男性の多くは、人生の全てを会社に捧げてきたため、会社以外の縁を持っていない。仕事を辞めた途端、社会での居場所をなくしてしまう人は少なくない。

さらに、高齢者が孤立する背景にあるのが「老後破産」の現実だ。ひとり暮らしの高齢者の多くは、自分の年金収入で生計を立てている。しかし、その収入が家計を維持するために十分なものではないことが分かってきた。みずほ情報総研の分析によれば、ひとり暮らしの高齢者およそ600万人のうち、年金収入が月額10万円以下の人が半数、およそ300万人に上ることが分かった。つまり、ひとり暮らしの高齢者の半数は、年金収入が生活保護費の支給水準(月額13万円前後。自治体によって差がある)を下回っていることが分かったのだ。実際に生活保護を受けている人は83万人(2017年)にとどまるため、200万人余りの人は、10万円以下の収入で暮らしていることになる。

シリーズ「老人漂流社会」の現場から～老後破産の実態とは～

NHKスペシャル「老後破産の現実」(2014年放送)の取材で出会った70代の男性は、毎月およそ10万円の年金収入がある。しかし、都内のアパートの家賃は6万円。手元に残るのは4万円。食費を切り詰めても、電気代さえ払えない月もあった。

男性は、食品関連の会社で正社員として20年余り働き、40代半ばで「自分の店を持ちたい」と会社を退職し、長年の夢だった飲食店の経営を始めた。夢をかなえることを優先したために、結婚もせずに必死で働く日々を送ってきた。しかし、バブル経済の崩壊後、飲食店は倒産。再就職先を探しても、50代で何ら資格を持たない男性には短期のアルバイトぐらいしか見つからず、暮らしていただくだけでやっとで、預金をする余裕もなかったという。

会社員だった頃、男性は友人と旅行に行くのが楽しみだった。旅先で撮影した写真の中には、笑顔の男性がいた。その写真を見ながら「老後、こんな目に遭うとは、若い頃は全く予想していなかった。」と肩を落とした。

社交的だった男性が、人付き合いを止めてしまった理由は「お金」だった。

「友人の集まりに参加すると、帰り際に『食事をしていかないか』『カラオケに行かないか』と誘われるわけ。お金がないから、と言えないから『用事がある』と断るんだけど、それが辛いわけ。断るぐらいなら、もう会わないようにするしかない。」

経済的な貧困が生んだ、つながりの貧困。こうして多くの人たちが縁を失っていた。

正月も「ひとり」

最近、お正月にコンビニに行くと「ひとり用おせち」が豊富な種類、並べられているのをよく見るようになった。もちろん、働く世

代のひとり暮らしも増えているため、こうした商品を手にするのはお年寄りだけではないだろう。しかし、年末年始をひとりで過ごし、せめて「おせち」でも、と手にする光景は想像するだけで寂しさを感じる。というのも、自分自身の老後も、いずれひとり暮らしになれば、そんなものかもしれない——と思えるからだ。

そんなとき、必ず思い出す女性がいる。無縁社会という番組の取材で出会った女性、若山鉢子さんだ。番組の放送を終えた後にも親しく付き合い、私にとって大切な人になっていた。しかし、一昨年1月、知り合って8年が過ぎた冬、亡くなってしまった。4月、名古屋の共同墓地に埋葬されたという知らせがきた頃、私は名古屋へ異動が決まった。

「彼女に呼ばれたのかもしれない。」

異動して初めての外出は、若山さんの墓参りだった。

出会った当時79歳だった若山さんは、年を聞けば驚くほど若々しい人だった。60歳まで看護師をした後、10年間、助産師として仕事を続け、70歳まで働いていたという若山さんは、動作もキビキビしていて、ひとり暮らしに不安がなさそうにも見えた。しかし、半年ぐらい通ううちに親しくなると、本音をもらしてくれるようになった。

「ひとりになると、涙出ることあるよ。テレビ見ていてもね、ふとね。何にもすることないやあって思えてね。人生が空っぽなのよ。」

なぜ、若山さんに頼れる知人やつながりがないのか。若山さんは子ども時代、満州で過ごし、戦後、母親に連れられ引き揚げてきた過去があった。父親とは生き別れ、戦後、母親は必死で働いて家族を守ってきた。しかし、その無理がたたって寝込むようになり、代わって働くようになったのが、まだ10代の若山さんだった。母親を看病しながら働いたため、

看護師の仕事も短時間しかこなせず、パートだったため、給与も十分ではなかった。そのため内職もしながら母親を支え続けた。そんな境遇を男性に話せず、結婚もあきらめた。

パートだったため、年金も毎月7万円余り。預金を取り崩しながら暮らしていると話してくれた。

出会った当初は、足腰もしっかりしていて、一緒に歩くと置いていかれそうになるほど早足で、スタスタ先を歩くような人だった。やりくり上手な若山さんは、節約に節約を重ね生活していた。食材は安い時にまとめ買いで、小分けに冷凍して食べていた。冷凍庫には、刻んだネギ、すり下ろしたショウガ、ゆでたハウレンソウなどが、1回分ずつラップに包んでぎっしりと入れられていた。「安い時にまとめて買って、こうしておけば、便利だし、節約になるでしょう。」と得意げに見せてくれた。そんな時に垣間見せる、いたずらっ子のような笑顔も忘れられない。

ある日、若山さんの家から帰ろうとすると「卵が余っているの。ゆで卵にするから食べてくれない？」と頼まれた。取材先でご馳走になるのは気が引けるが、腐って捨てるぐらいなら、と思い食べることにした。ゆで卵は好物で、2個をべろりと食べて「美味しかったです、ごちそうさまです。」と言うと、ほっとしたような、嬉しそうな顔をしていた。

その後、若山さんの家に行くと、必ず用意されているのが、帰り際に渡されるゆで卵。

「お土産のゆで卵。新幹線の中で食べてね。」

几帳面に折りたたまれた薬包紙を開くと、1個分の塩が包まれていた。ゆで卵を食べるとき、見送ってくれる若山さんの顔を思い浮かべ、寂しくなった。

生前に、遺骨を納骨するサービスを行っているNPOと契約していた若山さんの火葬や納骨はNPOが行った。その担当者に聞いてみる

と、火葬場に来たのは、NPOの担当者二人だけだったという。

若山さんと一緒に、生前に買った共同墓地の下見に行ったことがある。その時、すでに数百人が納骨されている大きな共同墓だった。

「大勢の人と一緒に墓に入れば、あの世では寂しくないから、安心できる。あの世で、もう一度、看護師として働きたいの。」

名古屋に異動して初めての休みの日、共同墓地へ墓参りに向かった。蒸し暑い日だった。墓碑銘に「若山鉢子」の名前を見つけたとき、なぜか、ほっとしたことを覚えている。

「お金なんか、持っていないから、小さなことでも幸せになれるのよ。」

どんな境遇でも、前向きに生きていた若山さんには多くのことを教えられたように思う。無縁社会を恐れてはならない、乗り越えていくものだという生き証として私に見せてくれたのではないか…そんな気がしてならない。

若山さんは、私にこう話したことがある。

「結婚して、家族を持って、子どもを育ててっという普通の暮らしをしたいって思ったこともあるのよ。でも、そんな普通の夢がかなわないものなのよね。」

ごく当たり前に家族と暮らすことさえ、手に入らない夢になってはならない。孤立と貧困をどう解決し、優しい社会を実現できるのか——そのために、できることを積み上げていきたい。

無縁社会を乗り越えろ！

NHKスペシャル「無縁社会」を放送した後、視聴者から1通の手紙が届いた。手紙には、「自分も社会との縁を失い、ひきこもりかけた。無縁社会は、自分の力で抜け出せる。それを伝えたいので取材に来て欲しい」ということが書かれていた。

手紙の主である、74歳の男性に連絡をとり、ご自宅を訪ねることにした。ご自宅は神戸駅の近くにあるタワーマンションだった。高層階の一室に男性を訪ねた。

男性は、大企業で重役まで務め、70歳近くまで仕事で家を空けがちだった。平日は接待で深夜まで、週末はゴルフで家を空ける日々を送ってきた。家のことは妻に任せきりで、マンションにも知り合いはいなかった。

退職後、これからは妻への恩返しをと思った矢先、妻が末期の膵臓がんで治療の手立てがないと分かった。会社に通っていた日々から、病院へ見舞いに通う日々へ。そんな日々も長く続かず、4ヶ月足らずで妻は亡くなった。妻の死後、葬式などの行事を全て終えると、男性は「抜け殻」のようになってしまい、家に閉じこもるようになった。一日一回、コンビニに弁当の買い出しに行く以外、外出もなくなり、テレビの前で漫然と過ごす日々が続いていた。

人との「つながり」を取り戻せ

そんなある日、お笑い芸番組を見ていたときだった。可笑しくて、笑ったのに声が出ない。男性は慌てて話そうとするが、ささやくような声しか出ない。声帯の筋肉をあまりに長期間使わないとそんな状態に陥ることがあると知り、自らの生活を猛省したという。

次の日から、男性はある決心をした。マンションから歩いて20分ほどのところに昔ながらの商店街があった。そこにお総菜を売る肉屋があった。

「ポテトサラダ150グラム、きんぴらの小さいパックをください。」

古くからある商店街の店は、コンビニとは違い、注文を口頭で伝える必要がある。男性の決心とは、その商店街で夕食のおかずを必ず買うことだった。下町の商店街に毎日通う

うち、なじみの店は増えていった。天気の話、昨夜のテレビ番組の話題、気づくと30分近く立ち話をする日もあった。

「人と話すだけで、こんなに生活が変わるなんて。」

男性は、よく出かけるようになった。映画を見に行ったり、大好きな古書店を巡ったり。そんな変化の兆しが現れ始めた頃、事件は起きた。

マンションの隣の部屋の住人が救急車で運ばれたのだ。高層階だったため、エレベーターに担架を運び入れるため、男性もドアを押さえる手伝いをしたり、管理人を呼びに行ったりするなど大活躍した。

その数週間後、退院した隣人が男性のもとを挨拶に訪れた。それが、貴重な出会いとなった。

「このたびは大変お世話になりました。」と切り出した女性は、お礼の言葉の後にこう続けた。「生前、奥様とは親しくさせていただいておりました。」

隣人の女性は、亡き妻の親友、長なじみだったというのだ。二人は、毎日、一緒に食事をするなど、互いの家を行き来していたというのだ。

「これは、いつも奥様に褒めてもらったニンジンケーキです。」

お礼にと手渡されたニンジンケーキは、食卓で度々見かけていた思い出のケーキだった。男性は、そのケーキを食べながら涙が止まらなかったという。

「これは天国の妻が作ってくれた縁に違いない。」

そう思った男性は、翌日、隣を訪ねた。男性は、隣人にある提案をした。それが無縁社会を乗り越える力になった「人形リレー」だった。

「人形リレー」がもたらしたもの

男性は、隣人の女性に、たった二人で始められる「見守り合い」を提案した。やり方は簡単だ。ひとつの人形を二人でリレーするのだ。

まずは、朝。朝刊を取りに行った男性が、ついでに、ドアの外に人形をぶら下げる。

そして、昼間。買い物や散歩に出かける隣人の女性が、男性のドアにぶら下がっている人形をはずして、自分のドアの外側にぶら下げる。

そして夕方。夕食のおかずを買いに出かけた男性が、隣人のドアから人形をはずし、自分の家の中に取り込む。そして、朝、再びぶら下げる…。

この人形リレーをしてから、男性は人生が劇的に変わったと話してくれた。晩酌のお酒が美味しくたまらない、というのだ。それまでは、飲み過ぎで夜中に具合が悪くなったらどうしよう、などと不安でお酒が進まなかったのが、「朝になって人形がかかっていたら、必ず、隣人が気づいてくれる」という安心感のせいか、お酒を安心して飲めるようになって、晩酌の時間が幸せな時間になった、というのだ。

「私が生きていること」を知って欲しい

二人は、それぞれ「今日、私が生きていることを、誰かが知ってくれているだけで、これほどの安心が得られるとは思っていなかった。」と話してくれた。

この「人形リレー」に感激した取材チームは、この取り組みをニュースの特集で伝えた。すると、多くの視聴者から「たったひとりでも、生きていると知ってくれるだけで、こんなに前向きになれるんだったら、私は、誰か寂しい人たちの『ひとり』になりたい」というメールやお便りが殺到した。

無縁社会を知って、不安を募らせている人ばかりではない。無縁な人たちのために、できることをしていきたいという思いであふれている。「日本は捨てたもんじゃない」と取材チーム一同、嬉しく思った日のことが忘れられない。

何かのきっかけで、誰しものが無縁社会の住人になり得る時代だからこそ、優しい縁にあふれる社会を目指していきたい——その一歩は、ただひとりの人とつながることから始めればいいのかもわからない。

著者略歴

板垣 淑子 (いたがき・よしこ)

東北大学法学部卒業。1994年NHK入局。報道局社会番組部、大型企画開発センターなどを経て現在NHK名古屋放送局報道部チーフ・プロデューサー。NHKスペシャル「ワーキングプア」、「無縁社会」等を担当。